

「小出地区地誌(草稿)」に記載されている生物についての考察

岸 一弘*

1 はじめに

「小出地区地誌(草稿)」は、広瀬正治氏(1887. 05. 18 ~ 1984. 12. 02)が手書き原稿としてまとめたものである。それを活字化したものが、昭和57年(1982年)に茅ヶ崎市教育研究所(現茅ヶ崎市教育センター)から発行された(以下、広瀬(1982))。

「小出地区地誌(草稿)」は「第一編 自然界」、
「第二編 人文界」の2編から構成され、「第一編 自然界」には野生生物に関する記述も見られる。原稿がまとめられた時期は明確ではないものの、明治期後半の小出地区の自然について窺い知ることのできる貴重な資料である。なお、小出地区(以下、当地域)は明治22年に町村制が敷かれた小出村を指すものと判断されるが、小出村は現在の茅ヶ崎市(以下、市内)堤、行谷、下寺尾、芹沢及び藤沢市遠藤を含めた地域である。

本稿では、当誌に記載されている野生生物について紹介するとともに、いくつかの種類については生物地理学、生態学等の観点から若干の考察を試みてみたい。

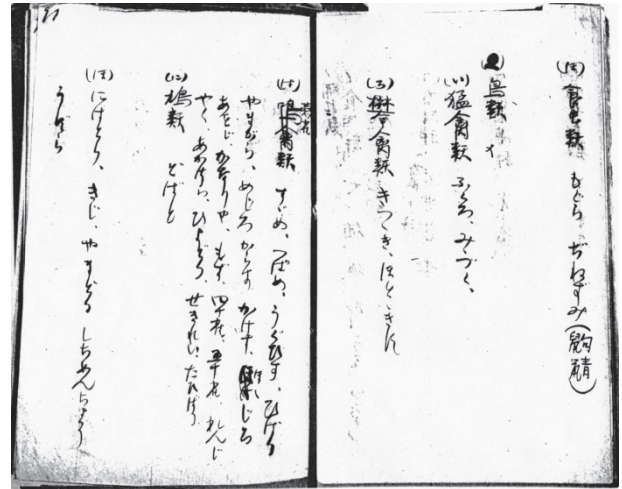
本稿をまとめるにあたり、文献や広瀬正治氏について種々ご教示いただいた茅ヶ崎市文化生涯学習課の平山孝通氏、茅ヶ崎郷土会の尾坂郭子氏、文献を貸与いただいた茅ヶ崎市教育センター、未発表記録をご教示いただいた岸しげみ氏、茅ヶ崎野外自然史博物館の諸氏に感謝申し上げます。

2 記載されている野生動物等

※飼育動物は、「」書きとした。

1) 哺乳類

- (い) 食肉類 狐、かわうそ、いたち、てん
 - (ろ) 有蹄類 野生種の記載はなし
 - (は) 齧歯類 兎、鼠
 - (に) 翼手類 こうもり
 - (ほ) 食虫類 もぐら、じねずみ
- ### 2) 鳥類
- (い) 猛禽類 ふくろ、みづく



小出地区地誌(草稿)

- (ろ) 拳禽類 きつゝき、ほととぎす
 - (は) ? 雀類 すずめ、つばめ、うぐひす、ひばり、やまがら、めじろ、からす、ほゝじろ、あをじ、「かなりや」、もず、四十雀、五十雀、れんじやく、あかはら、ひよどり、せきれい、たひばり
 - (に) 鳩 類
野生種の記述なし。
 - (ほ) 「にわとり」、きじ、やまどり、「しちめんちょう」、うずら
 - (へ) 渉禽類 くひな、しぎ
 - (と) 游禽類 がん、「あひる」、かも
- ### 3) 爬虫類
- (い) 亀 類 いしがめ
 - (ろ) 蜥蜴類 とかげ、やもり、かなへび
 - (は) 蛇 類 あをだいしょう、やまかづし、まむし、なめらへび
なめらへびは、シマヘビの俗称である。
- ### 4) 両棲類
- (い) 無尾類 ひきがへる、とのさまがへる、いぼがへる、あかがへる、あまがえる
 - (ろ) 有尾類 いもり
- ### 5) 魚 類
- (い) 硬骨類 うなぎ、どじょう、めだか、ふな、こひ、なまづ
 - (ろ) 円口類 やつめうなぎ

6) 昆虫類

(い) 鞘翅類 みちしるべ, げんごろう, がむし, みづすまし, こめつきむし, こくぞうむし, たまむし, かみきりむし(幼虫てつぼうむし), とらかみきりむし, ほたる, まめはんみょう, てんとうむし, かなぶんぶ, こがねむし, かぶとむし, くわがたむし, こがねむし

(ろ) 鱗翅類

(A) 蝶 類 あげはちょう, もんしろちょう, しづみちょう, 二化螟虫(三化螟虫), まつけむし, しろてふ(もんしろ, きてふ), しじみ

(B) 蛾 類 「かいこのてふ」, やままゆのてふ, てぐすむしのてふ, しゃくとりむし(うめー, くわー), よとうむし(蛾)

(は) 膜翅類 あしながばち, くまんばち, だんごばち, あり

(に) 雙翅類 はい(くそばへ, きんばへ), あぶ, か, ぶよう

(ほ) 半翅類 くさがめ(がむし), おほわた(しろばんば), うんか(つまぐろよこばい)

無翅類 しらみ

注虱類 あぶらむし

有吻類 のみ

蟬 類 はるせみ¹⁾, にいにいせみ, かなかなぜみ, あぶらせみ, つくつくぼうしせみ

¹⁾ 広瀬(1982)では, “はこせみ”と誤記されている。

(へ) 脈翅類 かげろう, うすばかげろう, くさかげろう, おはぐろとんぼ, やんま

(と) 直翅類 いなご, ばった, けら, かまきり, すづむし, まつむし, くつわむし, すいと, あぶらむし, しみ, こほろぎ, はたをり, はさみむし

益虫 省略

害虫 省略

7. 蜘蛛類 じょうろぐも, つちぐも, めくらぐも, だに, ひぜんのむし, ふくろぐも, ぢぐも

8. 多足類 むかで, げじ, やすで

9. 軟体動物

(い) 腹足類 かたつむり, たにし

(ろ) 弁 類 しづみ, からすがひ

10. 蠕形動物

(い) 環虫類 みゝず, ひる²⁾

²⁾ 広瀬(1982)では, “ひろ”と誤記されている。

(ろ) こうがいびる

広瀬(1982)では, “ころがいびる”と誤記されている。

3 記載されている野生動物についての考察

1) 哺乳類

(い) 食肉類

記載されている狐, かろうそ, いたちのうち, 現在も当地域に生息しているのはイタチ(ホンDOIタチ)であるが, 個体数は激減しており, 近年はなかなか確認できなくなってしまった。

キツネ(ホンDギツネ)は 2002 年に市内芹沢の柳谷で成獣を確認しており, 2000 年代前半までは市内北部で足跡を確認している。ただ, その後は確認できなくなっており, 市内から絶滅してしまった可能性が高い。

ホンDギツネの記録が未発表のままであったので, 下記に記載する。

足跡確認, 茅ヶ崎市芹沢城之腰, 21. II. 2005, 岸一弘(以下, 岸); 足跡確認, 茅ヶ崎市芹沢大谷, 14. II. 2005, 岸; 成獣 1 頭目撃, 茅ヶ崎市芹沢柳谷, 21. III. 2002, 茅ヶ崎野外自然史博物館; 足跡確認, 同地, 25. V. 2003, 岸; 足跡確認, 同地, 9. VI. 2003, 岸; 足跡確認, 同地, 31. I. 2005, 岸; 足跡確認, 茅ヶ崎市堤仲谷, 15. II. 2005, 岸しげみ

てん(ホンDテン)の記載もあるが, ホンDテンは県内においては山地に生息する種類なので, 過去においても市内に生息していた可能性は低いと判断される。

藤沢市に瀬郷という地名があるように, かつては当地域にもカワウソ(ニホンカワウソ)が生息していたものと思われる。昭和初期までは, 厚木, 二宮などで記録が得られているが, その後は神奈川県内でまったく記録されておらず, 神奈川県絶滅種の位置づけとなっている(広谷, 2006)。なお, 2012 年に改訂された環境省のレッドリストでは, 絶滅危惧種か

ら絶滅種へと変更された。

(ほ) 食虫類

ジネズミ(ニホンジネズミ)は現在でも市内の北部丘陵地域に生息しているが、個体数は少なく、少数の記録が得られているだけである。

2) 鳥類

(い) 猛禽類

「ふくろ」は、フクロウと思われる。個体数は少ないものの、現在でも当地域に生息している。みづつくは総称名なので、どの種を指すのか不明である。なお、市内で記録のあるミミズク類はオオコノハズク、コミミズク、トラフズクであるが、いずれも近年は確認されていない。

(ろ) 拳禽類

“きつゝき”は総称名なので、どの種を指しているのか不明である。なお、市内で記録のあるキツツキ類はコゲラ、アカゲラ、アオゲラの3種で、コゲラ、アオゲラは繁殖も確認されている。

(は) ? 雀類 (一文字目は判読不能)

五十雀(ゴジョウカラ)は市内に生息していない種類であるが、秋・冬には稀に低地へ飛来するとされている(日本野鳥の会神奈川支部, 2002)。当誌に記載されていることから、当時はそれほど稀ではなかった可能性がある。

(ほ)：グループ名が記載されていないが、キジ類と思われる。

ヤマドリは低地ではほとんど見られない種類で、日本野鳥の会神奈川支部(2002)では茅ヶ崎の記録がない。かつては、当地域にも見られたのであろうか。

ウズラは県内での記録が少ない種類で、日本野鳥の会神奈川支部(2002)では市内の記録がない。かつては当地域で見られたのかもしれないが、家禽として飼育されることもあるので、飼育されていたものを記載した可能性もある。

(へ) 渉禽類

“しぎ”は総称名なので、どの種を指しているのか不明である。現在も当地域で確認できるシギ類は、チュウシャクシギ、イソシギ、ヤマシギ、タシギ、クサシギの5種である。

(と) 游禽類

“がん”は、マガンもしくはヒシクイと思われる。現在県内では稀な種類となっている(日本野鳥の会神奈川支部, 2002)が、当時はそれほど珍しい種類ではなかった可能性がある。

“かも”は総称名なので、どの種を指しているのか不明である。現在も当地域で確認されているカモ類は、オシドリ、ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、キンクロハジロ、ホシハジロである。

3) 爬虫類

(い) 亀 類

近年、クサガメは外来種と位置づけられるようになっている(鈴木, 2012)。本誌に記載されているのはいしがめ(ニホンイシガメ)のみなので、在来のカメ類はニホンイシガメのみだったことを補完する資料と言えよう。

4) 両棲類

(い) 無尾類

“とのさまがへる”が記載されているが、神奈川県内の大部分の地域にはトノサマガエルが生息していない。トウキョウダルマガエルを指しているものと思われる。現在当地域にトウキョウダルマガエルは生息していないが、明治期には生息していたのであろう。現在、市内でトウキョウダルマガエルは絶滅危惧状態となっている。

“いぼがへる”は、ヒキガエル(アズマヒキガエル)やツチガエルの俗称として使用される。“ひきがへる”が記載されているので、ツチガエルを指している可能性もあるが、当地域でツチガエルの確かな記録はない。

(ろ) 有尾類

現在、藤沢市、茅ヶ崎市、寒川町にイモリは生息していないが、昭和の中頃に寒川神社や浜之郷でイモリを見たという伝聞情報があるので、かつて当地域にイモリが生息していた可能性がある。

5) 魚 類

(ろ) 円口類

“やつめうなぎ”(スナヤツメ)は、湧水域の減少や河川改修などの影響で県内では激減し、勝呂・瀬能(2006)では絶滅危惧 IB 類に位置付けられている。

かつては、当地域にも生息していたのであろう。

6) 昆虫類

(い) 鞘翅類

“みちしるべ” (ハンミョウ) は「続茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」にも記載されており(岸, 2015), 昭和初期までは市内および周辺地域に本種が生息していたものと思われる。

ゲンゴロウは、県内では絶滅種に位置づけられている(荏部, 2006)。鶴嶺地区では本種が記載されている(岸, 2015)が、かつては市内北部にも生息していたことを補完する資料となる。

ガムシは県内では絶滅危惧種に位置づけられており(荏部, 2006), 市内では絶滅種に位置づけられている(茅ヶ崎市, 2006)。市内矢畑にある矢畑金山遺跡からは室町時代後半期から戦国期の遺体が多数出土している(平野・岸, 1994)ので、かつては市内各所に本種が生息していたものと推察される。

“みづすまし” はミズスマシそのものを指しているのか定かではないが、「続茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」には“みづすまし、ひめみづすまし”の記載がある(岸, 2015)。本誌の記述からも、かつて市内にミズスマシ類が生息していたことが示唆される。

“こがねむし” が重複して記載されているが、異なる種類を指しているのかどうか定かではない。

(ろ) 鱗翅類

(A) 蝶 類

蝶類として蛾類の“二化螟虫(三化螟虫)” (ニカメイガ(サンカメイガ)), まつけむし(マツカレハ)が記載されているが、蛾類の項目もあり、単なる誤記とは考えにくい。当時は、これらの蛾類を蝶類と認識していたのであろうか。

(B) 蛾 類

「かいこのてふ」はカイコガ(飼育種), “やままゆのてふ” はヤママユ, “てぐすむしのてふ” はクスサンである。“しゃくとりむし(うめー, くわー)” は、ウメエダシャク, クワエダシャクと思われる。

(は) 膜翅類

“くまんばち” はスズメバチ類, “だんごばち” はマルハナバチ類を指す。

(に) 雙翅類

“くそばえ” はキンバエの別名としても使用されるが、別に“きんばへ”が記載されているので、ブンバエ類などの他種を指しているのであろうか。

“ぶよう” は、ブユのことと思われる。市内ではブユ類の確かな記録はないが、湘南地域では5種が記録されている(鈴木ほか, 2004)。

(ほ) 半翅類

ハルゼミは、市内では1994年の萩園の記録を最後に絶滅してしまった(岸・三輪, 1995)が、かつては当地域にも生息していたのであろう。

(へ) 脈翅類

脈翅類として、かげろう, うすばかげろう, くさかげろう, おはぐろとんぼ, やんまの5種が記載されているが、おはぐろとんぼ(ハグロトンボ), やんま(ヤンマ類)はトンボ目である。

(と) 直翅類

“すいと” は、すいっちょ(ウマオイ類)と思われる。“あぶらむし” はゴキブリ類, “はたをり” はキリギリスの別名である。現在市内北部にキリギリス(ヒガシキリギリス)は生息していないが、かつては市内北部にもキリギリスが生息していたのであろうか。

“しみ” はシミ目, “はさみむし” はハサミムシ目である。カマキリ, ゴキブリは広義の直翅類であるが、現在ではカマキリ目, ゴキブリ目に分類されている。

7) 蜘蛛類

“めくらぐも” は、ザトウムシ類(ザトウムシ目)の別名である。“ひぜんのむし” はヒゼンダニで、疥癬症の原因となるダニ類である。“つちぐも” が何を指すのか不明だが、コモリグモ類を指していたのかもしれない。

8) 軟体動物

からすがひ(カラスガイ)は、ヌマガイなどを含むドブガイ族の総称として用いられていたものと推察される。市内下町屋一丁目の旧相模川橋脚では、池が改修される前の1990年代まではヌマガイの生息が確認されていた。

4 記載されている植物

※植栽されている植物は、「 」書きとした。

作物 省略

観賞用(木本)

1. 「公孫樹」(イチョウ)
 2. 「南天」
広瀬(1982)では、“南天科”と誤記されている。
 3. 「ごしゅゆ」
 4. 「山楓(ヤマモミジ)」
 5. まゆみ(一名おぼく)
 6. 「庚申茨」 一名四季咲茨 野生茨の変化せるもの
 7. 「糸ひば、垂れひば」
 8. もち 冬青科(モチノキ科)
 9. 「さつき」
 10. 「ぢんちょうげ」
 11. 「梨」
 12. 玉椿 一名ねずみもち
玉椿は、ネズミモチの別称である。
 13. ひらぎ(柊)
 14. 「柘榴」
 15. 青木
 16. 「ボケ」
 17. いぬつげ
 18. 「梧桐 あおぎり」
 19. まさき 衛矛科(ニシキギ科)
 20. カナメ 一名あかめがし
アカメガシワのことと思われる。
 21. まき(槇)(イヌマキ)
 22. ねむ(ネムノキ)
 23. 「百日紅(サルスベリ)」
 24. 「垂桜(しだれざくら)」
 25. むるで
 26. いばた(イボタノキ)
 27. こまゆみ
 28. やまこうばし
 29. 「とべら」
- 材用樹木
1. 松
 2. 「杉」

3. くぬぎ
4. こなら(なら, はゝそ, ほうそ)
5. 檜
6. 赤檜
7. しばの木 又はあをだまと称し樟樹科
“しばの木”は、タブノキの別名である。
8. 桜

観賞用草木

1. 「まつばばたん」 馬葉菟科(スベリヒユ科)
2. 「はゝづき」 茄子科
3. 「天竺牡丹」 菊科
4. 苧(カラムシ)
5. 桔梗 桔梗科
6. 「おしろい花」
7. 「百日草」 菊科
8. 「百日紅(サルスベリ)」 菟科
9. 「草けふちくとう」 花荵科
10. 「紅鹿子」 百合科 舶来
11. 「ほうせんか」
12. 万年古? 百合科
13. のきしのぶ のきしのぶ科
14. 「コスモス」 菊科
15. 「菊芋」 菊科
15. 「ひまわり」 菊科
16. よし(あし) 禾本科
17. がま がま科
18. 「水玉蘭」 一名ほてい草 とちかゞみ科
19. はこねうつぎ 忍冬科(スイカズラ科)
20. つるうめもどき 衛矛科
21. 河原なでしこ 石升科
22. 夏づた(ツタ) 葡萄科
広瀬(1982)では、“藤づた”と誤記されている。
23. 冬づた(キヅタ) 五花科
24. 藪らん 百合科
25. やぶこうじゅ(ヤブコウジ) 紫金牛科(ヤブコウジ科)
26. 雨久 雨久科
27. 大とらのお 羊歯科
28. 「さぼてん」
29. 「芍薬」 毛茛科

30. 「あやめ」

糧牧草

1. けめしひば(メヒシバの別称) 禾本科
2. かもじぐさ 禾本科
3. ばれんしば 一名戸田しば 禾本科
4. めどはぎ 荳科
5. こまつなぎ 荳科
6. 牛のしっぺい 禾本科
7. ちがや(白茅) 禾本科
8. しば 或いはこうらいしば 禾本科
9. かるかや 禾本科
10. にはほこり 禾本科
11. ひめくゞ 荳科
12. すゞめのひえ 禾本科
13. けいぬびえ 禾本科
14. くさよし 禾本科
15. をひしば 禾本科
16. やはずはぎ 荳科
17. ちご笹 禾本科
18. みのぼろ 禾本科

広瀬(1982)では、“みのぼろ”と誤記されている。

19. むすびとはぎ 荳科
20. こぶなぐさ 禾本科
21. ねこはぎ 荳科
22. ひえがえり 禾本科
23. 越後つなぎ 禾本科

薬 用

1. やくし草 菊科
2. 水引 蓼科
3. にはやなぎ 蓼科
4. いのこづち 莧科(ヒユ科)
5. 「大棗」 クロウメモドキ

5 記載されている植物についての考察

1) 観賞用(木本)

記載されているもののうち、在来種はまゆみ、もち(モチノキ)、ひらぎ(ヒイラギ)、青木(アオキ)、いぬつげ、まさき、カナメ(アカメガシワ)、まき(イヌマキ)、ねむ(ネムノキ)、ぬるで、いばた(イボタノキ)、こまゆみ、やまこばしである。とべらは海

沿いの砂丘地には自生するが、丘陵地のものは植栽されたものである。

2) 材用樹木

くぬぎ、こなら、赤檜(アカガシ)、しばの木(タブノキ)は、在来種である。

松のうちクロマツは自生のものもあるが、植栽されるものが多い。アカマツは県内では山地のシイ・カシ帯〜ブナ帯下部に自生する(神奈川県植物誌調査会編, 2001)ので、すべて植栽されたものである。

「檜」はアラカシ、シラカシのいずれか、あるいは両者を含めた呼称なのか不明である。

「桜」は総称名であるが、在来種のヤマザクラ、オオシマザクラも含んでいるものと思われる。

3) 観賞用草木

記載されているもののうち、在来種は苧(カラムシ)、のきしのぶ、よし、がま、はこねうつぎ、つるうめもどき、河原なでしこ、夏つた(ツタ)、冬つた(キヅタ)、やぶこうじゅ(ヤブコウジ)である。河原なでしこ(カワラナデシコ)は現在市内北部では見られなくなっており、南部砂丘地に自生地がわずかに残存するのみである。桔梗(キキョウ)は市内での確かな記録はないが、かつては自生していたのではないかと推察される。

・百日紅(サルスベリ) 莧科

莧科(ヒユ科)となっているが、ミソハギ科である。

・万年古? 百合科

3文字目の漢字がよくわからないが、「万年…」の字とユリ科であることから、オモトではないかと思われる。オモトは漢字で書くと、万年青となる。

・水玉蘭 一名ほてい草 とちかゞみ科

「ほてい草」はホテイアオイの別名なので、ホテイアオイのことと思われる。ホテイアオイはミズアオイ科で、南アメリカ原産ある。

・雨久 雨久科(ミズアオイ科)

ミズアオイのことである。勝山ほか(2006)では絶滅種とされているが、かつては市内に自生していたのであろうか。

・大とらのお 羊歯科

市内に自生するシダ類にトラノオシダがあるが、

「大とらのお」が何を指しているのか不明である。

4) 糧牧草

記載されているものは、大半が在来種である。

・ばれんしば 一名戸田しば

和名は、トダシバである。別名のばれんしば(馬簾しば)は、花穂の形から名付けられたとされる。

・かるかや

「かるかや」は、メガルガヤとオガルガヤの総称である。オガルガヤは市内では準絶滅危惧種に位置付けられており(茅ヶ崎市, 2006), メガルガヤは市内での記録がない(神奈川県植物誌調査会編, 2001)。

・やはずはぎ

ヤハズソウの別名である。

・みのぼろ

市内では 1978 年以前に市内南部で記録されている(神奈川県植物誌調査会編, 2001)。かつては、当地にも自生していたのであろう。

・越後つなぎ

イチゴツナギ(苺つなぎ)のことと思われるが、なぜ「越後つなぎ」と表記されているのか不明である。

5) 薬 用

記載されているのは、大半が在来種である。

大棗(クロウメモドキ)は、県内では山地に分布する(神奈川県植物誌調査会編, 2001)。有用植物ではなく、花も地味なので、なぜ植栽されたのか不明である。

参考文献

茅ヶ崎市, 2006. 茅ヶ崎市自然環境評価調査 概要報告—自然環境評価マップで茅ヶ崎の自然を見よう. 42. pp.

浜口哲一, 2006. セミ類. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp. 331. 神奈川県立生命の星地球博物館, 小田原.

平野幸彦・岸 一弘, 1994. 茅ヶ崎市金山遺跡(第一次調査)から出土した昆虫遺存体. 文化資料館報告, (2):9-15.

広瀬正治, 未刊(手書き原稿). 小出地区地誌(草稿).

広瀬正治, 1982. 小出地区地誌(草稿), 81 pp. 茅ヶ崎市教育研究所, 茅ヶ崎.

広谷浩子, 2006. 哺乳類. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp. 225-232. 神奈川県立生命の星地球博物館, 小田原.

神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌, 1584 pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

荏部治紀, 2006. 水生甲虫. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp. 385-392. 神奈川県立生命の星地球博物館, 小田原.

勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物誌調査会, 2006. 維管束植物. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp. 37-130. 神奈川県立生命の星地球博物館, 小田原.

岸 一弘, 2015. 「続茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」に登場する動植物についての考察. 文化資料館調査研究報告, (24):67-74+図版.

岸 一弘・三輪徳子, 1995. 相模川河川敷(茅ヶ崎市萩園)におけるハルゼミの記録. 文化資料館調査研究報告, (3):55.

日本野鳥の会神奈川支部, 2002. 20 世紀神奈川の鳥—神奈川県鳥類目録 IV—, 340. pp.

勝呂尚之・瀬能 宏, 2006. 汽水・淡水魚類. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp. 275-298. 神奈川県立生命の星地球博物館, 小田原.

鈴木 大, 2012. 遺伝的変異から見たニホンイシガメの進化史と日本産クサガメの外来性について. CREEPER, 11 (61):47-57.

鈴木 裕・脇 一郎・久保浩一, 2004. ハエ目. 神奈川県昆虫誌, pp. 845-906. 神奈川昆虫談話会.

富永富士雄, 1994. 茅ヶ崎市金山遺跡第 1 次調査の成果—昆虫を出土した 15 号溝状遺構の概要—. 文化資料館報告, (2):1-8.

*社会教育課



市内では記録の少ないニホンジネズミ(死体)



1990年代まで旧相模川橋脚に生息していたヌマガイ



市内では絶滅危惧状態となっているトウキョウダルマガエル



南部砂丘地に残存するカワラナデシコ



かつて市内に生息していたと思われるイモリ(アカハライモリ)



穂をつけたオガルガヤ